広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	和辻哲郎と芳賀矢一の日本人論比較〈研究論文〉
Author(s)	王, 艶玲
Citation	HABITUS , 16 : 75 - 85
Issue Date	2012-03-20
DOI	
Self DOI	10.15027/39010
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00039010
Right	
Relation	

和辻哲郎と芳賀矢一の日本人論比較

王　　艶　玲

（広島大学大学院）

1．はじめに

和辻哲郎の『風土』は、部分的に何回かの改稿を重ねて1935年に単行本として出版された。この著作は現在でも日本文化論の古典の一つに数えられている。井上光貞は、日本文化論を、一つに、他民族の文化との比較において日本文化を位置づけるものと、二つに、他の文化や文明を摂取する仕方を通して日本文化を理解するものとに分け、第一系列の筆頭に『風土』を挙げている。[1)] 確かに和辻は、『風土』では「モンスーン」「砂漠」「牧場」の三つの風土類型を相互に比較しながら、日本文化の特性を際立たせている。しかし日本人の特性に関しては、風土との連関から必然的に導出されたというよりも、むしろパターン化された日本人の性格が前提にされ、「風土」の概念は後からくっ付けただけのように思われる。つまり、日本人論については、昔からの主張を基にして、それを少し言い換えただけのように思われる。

この小論は、このことを裏付けるために、まず、『風土』の中で言及されている日本人の性格を洗い直し、次に、『風土』以前に出版された文献として『国民性十論』を取り上げ、ここでの日本人論と『風土』の日本人論を比較する。

2．『風土』における日本人の性格

台風が吹き始める時の猛烈的な激しい勢いは、強い暴風雨の後に急に消失し、再び元の静けさに帰る。和辻は、日本人のうちにもこのような台風的な性格が

認められるとして、ここから「受容」と「忍従」という、日本人の特性に関するキーワードを取り出す。「受容」とは「受け入れること、取り入れること」[2)]である。日本人の感情は、一つの核心的なものに基づいて永遠に持続しつつ、突発的な激しい変化の中で絶えず深化する。次に、「忍従」は「たえしのぶこと、たえること」[3)]である。日本人の感情は忍従の奥に反抗を含むが、いくら反抗しても忍従の気質は変わらない。すなわち、日本人は反抗しつつ忍従しているとも、忍従しつつ反抗しているとも言える。だから日本人の忍従的な性格は本質的には非戦闘的である。

このように和辻は、「受容」と「忍従」を手掛かりにして、「しめやかな激情」や「戦闘的恬淡」という日本人の特性について論じる。この特性は、日本人の恋愛(男女の間)において顕著である。『古事記』や『日本書紀』における恋愛譚は、日本人の恋愛観を端的に示している。それは、しめやかな表面の裏に激情を蔵した、激しい戦闘であり諦めの恬淡である。恋愛中の男女には精神だけでなく、肉体の結合も不可欠である。プラトニック・ラブのような魂だけの交流は日本人には不向きである。恋愛中の男女は必ず精神と肉体の両面における完全な結合を求める。そのために、肉体の結合が得られない場合には、驚くほど恬淡に諦める。これが日本人の恋愛観である。だから、日本人の恋愛には激情的戦闘的な強さと恬淡な諦めの静けさが併存していると言われる。

「しめやかな激情」は、家族の「間柄」にも見いだされる。生活の中心を牧場的人間がポリスに置き、砂漠的人間が部族に置くのに対して、モンスーン的人間は家族に置く。家族の利益は個々の構成員の利益よりも優先される。それゆえ夫婦、親子、兄弟の間に零距離の「しめやかな情愛」が生まれる。また、「家」の利益を得るために、表面的な結合だけでなく、それを持久する底力のある激情も必要である。さらに、家族の名誉のためには、自己犠牲や命を投げ捨てる覚悟も必要である。このように、日本の家族のうちにも「しめやかな激情」と

「戦闘的な恬淡」を見て取ることができる。

また和辻は、日本の「家」と連関させて、日本人の性格を論じる。「家」という漢字は、「いえ」とも「うち」とも読める。日本人は「家」という観念を「うち」として把握している。ヨ―ロッパには「ハウス」によって区切られた内外の区別があるだけで、「うち」と「そと」の区別は見いだせない。和辻によれば、日本語の「うち」と「そと」には、一つに個人の心の内外、二つに家屋の内外、三つに国または町の内外の意味がある。しかもこの区別は、家族の「間柄」が基準になっている。

日本人は「家」で一緒に生活している人を「うちの人」と呼ぶ。「うちの人」は「距てない結合」を持つ。「距てない結合」というのは、物理的には、日本の家屋においては部屋と部屋の間の壁が薄いとか、扉に鍵がないとか、いったことに示され、心理的には、一つの家で一緒に暮らす人々の関係が零距離で、互いに無配慮なことを意味する。「うち」では、人からの迷惑や攻撃を気にすることなく、精神的にリラックスできるのに対して、「そと」では、人目を気にして警戒するとか、鍵をかけるとかしなければならない。このように、「うち」での無遠慮と信頼、「そと」での遠慮と不信頼は、日本の「家」の構造と深く関係している。

日本人全体の特性も「家」を自覚することから明らかになる。「家」が家族の「家」であるのと同様に、国家も無数の国民からなる「家」である。それゆえ国家は「家」の「家」として位置付けられる。どちらも「家」を媒介にして、個人が全体性によって規定される点では同じである。家族は人倫の初期段階であり、国家は人倫の最高段階である。両者は「距てなき間柄」を共有しつつも、家族においては「孝」が求められ、国家においては「忠」が求められる。しかし和辻は、国民の全体性を自覚させるために「忠孝一致」を求めるべきだとしている。

3.『国民性十論』における日本人の性格

国民性というのは、国民の性格である。すなわち、ある国の社会成員全体が長期間の生産・生活のプロセスの中で形成した性格と言ってもよい。もちろん、国民性格は単に個人個人の性格のトータルではなく、国民全体の共通している価値観及びそれに応じる行動様式にほかはない。それゆえ、国民性格というのは必ず国民全体の代表的、典型的な性格を表していると言えよう。

1907年に冨山房から出版された芳賀矢一の『国民性十論』は国内外の注目を集めた。芳賀はこの著書で日本国民の特性として「忠君愛国」「祖先を崇び家名を重んず」「現実的・実際的」「草木を愛し自然を喜ぶ」「楽天洒落」「淡泊瀟洒」「繊麗繊巧」「清浄潔白」「礼節作法」「温和寛恕」の十個を挙げ、それぞれについて論じている。これは日本の国民性について全面的に論じた著作とみなされ、その後の日本文化論研究に大きな影響を与えた。それと同時に、厳しい批判にも晒された。例えば、中国社会科学院日本研究所研究員の張建立は「日本国民性における研究の現状と課題」という論文の中で、芳賀矢一は単に日本国民性について十個の特性を叙述しているだけで、それぞれの特性の裏に潜む根源的なものに触れていない、と指摘している。[4)]この批判は正しいであろうか。すなわち、芳賀矢一は表面的にしか日本国民性を論じていないのであろうか。彼は国民特性の裏に潜んでいる根拠、すなわち精神的なものを全然取り扱っていないのであろうか。必ずしもそうではないと、筆者は考える。以下においては、この点に注意しながら、具体的に日本人の性格について見てみよう。

3.1　楽天洒落

「楽天洒落」という漢字は四字熟語ではない。これは「楽天」と「洒落」という、二つの独立した語からなる。そこで、まず、それぞれの語の意味や用例を確認

しておこう。「楽天」は「①人生を楽観すること、②自分の境遇に案じてあくせくしないこと」を表し、「楽天家」「楽天観」「楽天主義」「楽天地」「楽天的」「楽天論」などの用例がある。[5)]

芳賀は、日本人が桜を好むのはパッと咲いてパッと散るのがいさぎよいからであり、それがそのまま日本人の楽天的性質を表しているという。楽天的性質とは「天真爛漫」の意味である。[6)]このような「物事に頓着しない」「快活な」精神は、「しき島のやまと心を人とはば朝日に匂ふ山桜」[7)]という本居宣長の歌や「童話の花咲爺」のうちに見いだされる。日本人が戦場に勇ましく進んで、勇ましく戦って、勇ましく討死できるのも、この楽天的な精神のためである。[8)]また、日本人が現世または自然だけを重んじて、未来の死後のことに対して深い関心を持たないのも、このためである。それゆえ、このような日本人の快活な性格は、「強い宗教心には遠ざかつて居り、深い思索の方面には向かぬ」[9)]と言われ、日本神話の「単純さ」や文学の「幽玄」や「深刻さ」になって現れている。[10)]

西洋文学が複雑で深い思索を持つのに対して、日本文学は楽天的で「この世の中を楽しく見て居る」といった感じである。すなわち、日本文学は「世の中に対してむやみに腹を立てたり、無暗に悲しがったり、無暗に嘲笑したり、むやみに高くとまったり」はしない。[11)]同様の傾向は、「天の窟戸」や「海の幸、山の幸」のような日本神話や神楽のうちにも見て取れる。やはり「無邪気さ」や「滑稽さ」が根底に潜んでいる。[12)]

「下がかった話」が多いのも日本人の天真爛漫な、気楽な性質の現れである。例えば人前に肌を示すことを西洋人は嫌うが、日本人は気にしない。西洋人は、日本の婦人が人前で素肌を晒すことを非難するが、「裸体と道徳とは別問題である」[13)]という。相撲取り、風呂屋の雑浴、屁や放屁なども「下がかったもの」であるが、これらは「習慣」に過ぎない。それゆえ、ここから直ちに日本人が

猥褻な趣味を持つとは言えない。日本人は猥褻な言葉や汚い言葉を言ったり、書いたりしても、実際にそれに熱中するわけではない。日本人はそうしたものに「寛容」なだけである。

また、芳賀は、日本人は物事に対してあきらめがよい、思い切りがよい、と指摘する。日本人には「侠気」があり、「くよくよと女らしく一つの事に執着するのは大嫌ひである」。[11]特に、恋愛においては、日本人の気質がよく現れている。日本人は失恋しても、自殺や発狂のような極端なことにはならない。恋愛においてもあきらめがよい。男らしいというのは「おもひきつて未練のない」ことである。ただし、恋愛の義理から自殺することもあるが、これは異性への「執着」とは異なる。すなわち、日本人は楽天的なので物事に対する執着心が少ないのである。いかなる場合にも、ある程度熱中するが、しかし極端に「一線」を越えてそれを求めることはない。

芳賀は、日本人のこの特性を、金銭に関して中国人と比べている。上海の車夫は、客に叱られたり殴られたりしても、金銭のために我慢できる。それに対して、日本の車夫は少々の金銭のために、牛馬のように人から殴られることを認めない。車夫といっても、物や人を運ぶ労働者だから、軽蔑されたり、虐められたりすることに我慢できない。要するにこれは、中国人が金銭への執着が強いのに対して、日本人は弱いということである。

次に、「洒落」について。「洒落」は、「①気のきいたさま、いきなこと、②気のきいた身なりをすること、おしゃれ、③座興にいう気のきいた文句、④たわむれに軽くふざけてする事、冗談事」を表し、「洒落込む」「洒落っ気」「洒落のめす」「洒落本」「洒落者」などの用例がある。[15]このように「洒落」という語は、色々なニュアンスを含む。芳賀はその厳密な定義を避けて「シャレ」とカタカナ表記して、その特色を「優長ではなくして小起用」、「頓智機智」、「みえ」、「気前がいい」、「無鉄砲」などの言葉で形容した後に、「永く一つのこと

に執着するとかはせぬ」と言い換えている。[16]さらに「おもい切りがよくつて何事にも執着せぬ。しかし名誉といふ事はあく迄守る」[17]ことであるという。このように見てくると、どこまでが「楽天」で、どこからが「洒落」なのかは判別しにくい。この二つの日本人の特性は、はっきりと分けられないと言ったほうがよいだろう。つまり、いつまでも一つのことに執着しないという楽天的な心根は、洒落た意気な気分に支えられているのである。

３．２　淡泊瀟洒

「淡泊瀟洒」という漢字も四字熟語ではない。これも「淡泊」と「瀟洒」という二つの独立した語からなる。「淡泊」は「①濃厚でないこと、あっさりしていること、②よくの少ないこと、さっぱりしていること、③てらわず飾らないこと」をいい、「瀟洒」は「①すっきりとしてあかぬけしたさま、②俗を離れてあっさりしているさま」をいう。[18]ここから「淡泊瀟洒」が類似語からなることが分かる。

芳賀は「淡泊瀟洒」を、単純でさっぱりしていることとして規定する。これと「楽天洒落」には重なる部分がある。「淡泊」も「楽天」も、単純な心情がなければ、「瀟洒」にも「洒落」にもならない。言い換えれば、日本人の「洒落」と「瀟洒」の気質の根本は単純さにある。日本人は、単純だからこそ、思い切りがよく、あきらめもよい。日本人は、単純だからこそ、さっぱりして素朴なものを好む。日本人の単純さは、もともと島国としての特有な風土から規定されたことにもよるし、後世から影響されたことにもよる。芳賀によると、「精神を静かにして、物に動ぜぬようにする」[19]禅は、日本人の単純または淡泊な気質と最も適合しているから、日本人の生活に浸透したとされる。

日本人がこの「淡泊瀟洒」すなわち「単純」な性格を持つことは、風土の隅々に現れている。芳賀は、西洋及びシナと比較して、日本人のこの性質を説明し

ている。食生活の方面では、西洋とシナと違って、日本は島国であるので、日本人は肉より単純な魚類をたくさん獲っている。また、日本料理は、西洋のパター、シナの辛いもののような濃厚な味ではなく、さっぱりしている。服装から言えば、日本人は鮮やかな色彩より素朴な白を好み、複雑の絵柄より単調な絵柄を好む。建築物から見れば、日本の建築はサラリとした単調なものを含む。また、日本人の「単純さ」は日本語にもよく示されている。中国語と比べると、日本語の発音は五十音図を基にしているので、非常に単調と言える。

また、芳賀は日本の能楽を西洋のオペラと比べて、「能楽の音楽や舞台の単簡で装飾の無いことオペラの複雑で人目を眩惑する様なことは著しく目に立つが、日本のはその単簡なところに妙味をもつて居る」[20]という。すなわち、能楽が「単純」「質朴」であるのに対して、オペラは「複雑」「装飾」である。しかしその「粗末なところが即ち能楽の生命である」[21]。また能楽には「有の目附、無の目附」がある。これは舞台に道具立てや背景がなくても、「有るものとして仮定してその心得をする」ことである。これは観客の想像力をかきたてるための工夫である。能楽が「無限の趣味」[22]と呼ばれる所以でもある。

4．検討

芳賀も、和辻と同じように、国民の性格と気候風土とが関連することを指摘している。

> 「暗い部屋に居れば心も自然陰気になり、明るい部屋に居れば精神も自づと活発になる。我国民の快活楽天な気象は気候風土に影響せられた事の多いことは前にも言つた通りである。北欧の曇り勝ちの霧深い天気と、南欧の伊太利希臘あたりの晴朗なさつぱりとした天気とは比べ物にならぬ。その点で日本人は北欧の人よりもむしろ南欧の人と性質の類似点が

ある。」[23)]

これはヨーロッパの風土に言及したものである。ここで芳賀は、ヨーロッパの気候を北欧と南欧に分けて、北欧が「曇り勝ちの霧深い天気」であるのに対して、南欧は「晴朗なさつぱりした天気」であり、日本人の性質は南欧に似ていると指摘している。日本人の性質は言うまでもなく「快活楽天」である。つまり、日本でも南欧でも、気候が「晴朗なさつぱりした天気」なので、両国民は「快活楽天」になるという主張である。これは明らかに自然的決定論の考え方である。

和辻の場合には、自然から一方的に人間の性格が規定されるといった単純な風土概念ではない。彼のいう風土は、人間と自然とが相即関係にある。例えば寒さの認識に関しては、「私」という主観が感官を通じて外気の寒さを認識するから寒いのではない。外気の寒さと一体となっている「私」自身を感じるがゆえに寒いのである。すなわち、われわれは寒さを自己了解するのである。

当然のことながら、和辻のような巧みな論法を芳賀に期待することはできない。彼は和辻と違って、あくまでも文学者だからである。しかし引用文からも分かるように、彼が国民の性格と自然風土を密接に関連すると考えていたのは間違いない。この芳賀の考え方は、例えば「ギリシア的自然は従順であり明朗であり合理的である。…右のごとく風土的性格がギリシア的精神の性格となった」[24)]とか「風土の陰鬱は直ちに人間の陰鬱なのである」[25)]とか和辻が言う場合と本質的にさほど違いはない。

次に、日本人の性格についても見ておこう。とりわけ、注意したのは、日本人の恋愛観についてである。すでに見たように、それを説明するのに、和辻は「しめやかな激情」や「戦闘的恬淡」という言葉を使い、芳賀は「楽天洒落」や「淡泊瀟洒」という言葉を使っている。このように二人が繰り出す言葉は明らかに

異なっている。しかしながら日本人の恋愛観に関する双方の叙述を比較すると、さほど違いがないことに気が付く。和辻は、精神と肉体の結合に男女の恋愛の本質を見いだす一方で、これに失敗したときの諦めの心境を「恬淡」として特徴づけるのに対して、芳賀は、失恋したときに執着しない性格を楽天的として特徴づける。このようにその命名の仕方は異なるが、男女の恋愛を通じて現れてくる日本人の性格内容については、両者は一致しているのである。

5、おわりに

小論を通して、和辻の『風土』が芳賀の日本人論から大きく影響されていることがある程度明確になった。日本人の「しめやかな激情」や「戦闘的恬淡」という性格は、むしろ「楽天洒落」や「淡泊瀟洒」という気質から得たものではないかと考えられる。しかしながら、和辻は、芳賀の優れているものを吸収すると同時に、彼の偏った見方をも吸収してしまった。つまり、彼らは日本人の特性を研究するときに、ほぼ男性の性格でもって日本人全体を代表させているということである。そうであれば、日本人女性はどんな気質を持つのであろうか。日本人男性の性格と似ているのであろうか、それとも、まったく違うのであろうか。また、小論では、和辻の『風土』の中の日本人性格と芳賀の『国民性十論』の中の二論しか取り扱っていないので、両者の異同について十分に詳述できていない。この点は今後の課題として残して置きたい。加えて、今後は『日本精神史研究』『続日本精神史研究』『日本古代文化』『日本倫理思想史』などの文献を中心に、日本精神をより深く研究していきたいと思う。

註

1）井上光貞「解説」『風土』岩波文庫　2007年　290頁参照。
2）新村出編『広辞苑』（第六版）岩波書店 2008年。

3）同書。
4）張建立「日本国民性における研究の現状と課題」『日本学刊』2006年6期 131-142頁参照。
5）『広辞苑』
6）芳賀矢一『国民性十論』(生松敬三編『日本人論』冨山房百科文庫 1977年所収) 189頁。
7）口語訳は「大和心とは何かと人がたずねたら、それは朝の日の光をあびて咲き匂う山桜のようなものだと答えよう」である(宮腰 賢・桜井 満・石井正己・小田 勝編『全訳古語辞典』(第三版) 旺文社　2003年参照)。
8）『国民性十論』189頁。
9）同上。
10）同上。
11）同書　190頁。
12）同書　191頁参照。
13）同書　192頁参照。
14）同書　195頁。
15）『広辞苑』
16）『日本人論』196-197頁参照。
17）同書 198頁。
18）『広辞苑』
19）『日本人論』204頁。
20）『国民性十論』210頁
21）同上。
22）同書 211頁。
23）同書 202頁。
24）『風土』98頁。
25）同書 135頁。